日本小説の支那訳

芥川龍之介

上海(シャンハイ)の商務印書館から世界叢書と云ふものが出てゐる。その一つが「現代日本(にっぽん)小説集」である。これに輯(あつ)めてあるのは国木田独歩(くにきだどっぽ)、夏目漱石(なつめそうせき)、森鷗外(もりおうぐわい)、鈴木三重吉(すずきみへきち)、武者小路実篤(むしやのこうぢさねあつ)、有島武郎(ありしまたけを)、長与善郎(ながよよしを)、志賀直哉(しがなほや)、千家元麿(せんけもとまろ)、江馬修(えましう)、江口渙(えぐちくわん)、菊池寛(きくちくわん)、佐藤春夫(さとうはるを)、加藤武雄(かとうたけを)、僕、この十五人、三十篇である。このうち、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、江口渙、菊池寛の五人のは、魯迅(ろじん)君の訳で、その外(ほか)は皆、周作人(しうさくじん)君の訳である。そして、胡適(こてき)校としてある。

千九百二十二年五月 於北京(ペキンにおいて)、——と云ふ周作人君の序文によれば、「日本(にっぽん)の小説は、二十世紀に於(お)いて驚異

すべき発達をし、国民的文学の精華となつたばかりでなく、幾多の有名な著作は又、世界的価値を持つやうになつた。その点は欧洲現代の文学と比較するに足る位であるが、唯文字の関係によつて、日本の小説を翻訳することは、欧洲人には甚だ容易でない。その為めにあまり世界に知られずにゐる。しかし支那は日本と種々の関係があり、支那人は日本を知る必要もあれば、亦、日本を知る便利もある。そこでこの翻訳集を出した」と云ふことである。猶又「これ等の小説を選択した標準は、日本の現代の小説を紹介すると云ふ点にあるけれども、十五人の作家を選んだのは、大半個人

的趣味によつた」とも云つてゐる。も一つ次手（ついで）に紹介すれば「この外にもまだ、島崎藤村（しまざきとうそん）、里見弴（さとみとん）、谷崎潤一郎（たにざきじゆんいちらう）、加能作次郎（かのうさくじらう）、佐藤俊子（さとうとしこ）等（とう）の如き幾多の作家があつて、本来選に入るべきであるけれども、時間と能力との関係によつてこの集に収めることの出来なかつたのは甚だ遺憾（ゐかん）である」とも云つてゐる。

翻訳は、僕自身の作品に徴（ちよう）すれば、中々正確に訳してある。その上、地名、官名、道具の名等（とう）には、ちやんと註釈をほどこしてある。

例へば、「羅生門（らしやうもん）」の中では、

帯刀——古時的官、司追捕、糾弾（きゆうだん）、裁判、訴訟等事。

平安朝――西暦七九四年以後約四百年。

等(とう)の類である。尤(もつと)もこの註には、多少妥当(だたう)を欠いたものもないではない。

例へば、加藤武雄君の「郷愁(きやうしう)」のうちに、デコ坊（凸哥児）を註して、

Dekkobō ――原意是前額凸出的小児、後来只当作一種親愛的諢名。

と云ふのは好(よ)い。しかし「山の手(やまのて)」を註して、

山手――原意是近山的地方、此処却専指東京本郷一帯高地、……云々

と云ふのは少し大雑把(おほざつぱ)である。牛込(うしごめ)の矢来(やらい)は、本郷(ほんがう)一

帯の高地にははひらない筈である。けれどもこれは、白壁(はくへき)の微瑕(びか)を数へる為めにあげたのではない。たとひ妥当を欠いたとしても、これ程僅かしか欠かないと言ふことを示す為めにあげたのである。

巻頭に周作人(しうさくじん)君の序文のあることは既(すで)に述べたが、巻末には各作家に関する短かい紹介を附録として添へてある。これも先づ要領を得てゐると言はなければならぬ。

例へば、武者小路実篤(むしやのこうぢさねあつ)は――千八百八十五年に生れ、「白樺派(しらかばは)」の中心人物となり、近来日向(ひうが)に「新しき村」を建設し、耕読(こうどく)主義を実行す。彼の著作は単純真率(しんそつ)、

技巧を施さず、自ら清新の気を具ふ。極めて人を感動せしむる力量あり。彼は「彼が三十の時」（千九百十五年）の序の中に、嘗つてかう言つてゐる。下略。等の類である。

　これを現代の日本に行はれる西洋文芸の翻訳書に比べてもあまり遜色はないのに違ひない。もつと詳しく紹介すれば面白いかも知れないが、少し面倒くさくなつたからこれだけに止めることにする。

（大正十四年三月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。